

作業療法はロボットと どう向き合っていくか

特集にあたって

高齢化の加速による介護ニーズの増大、労働人口の減少等に伴い、その解決手段の一つとして医療・介護現場でのロボット技術の開発・普及が進められている。開発支援や実証試験、導入支援といった政策や事業も拡大されているが、十分に普及したといえる状況ではない。

ロボットの導入目的はさまざまであるが、主なものとしては、対象者の生活支援・自立支援の促進と同時に、支援者の負担軽減や業務の効率化が挙げられる。ロボットを効果的に活用するためには、課題や目標を明確にしたうえで導入計画を立て、対象者に適したロボットを用い、課題解決に向けた運用・実践が不可欠である。ロボットを導入したが運用できていないといった事例もあり、効果的に活用できる人材の育成や組織づくりも必要である。人（対象者とその支援者）と環境（対象者の生活環境や支援者の組織・体制・業務オペレーション）をアセスメントして、道具（ロボット）を適合・活用し、その効果を検証することに、OT のもつ技術や視点は大きい役立つ。また、ロボットの開発において、OT はニーズ（対象者）とシーズ（開発側）のどちらにも接点をもち、それぞれをつなぐ役割を担うこともできる。

本特集では、先進事例を通してロボットの理解を深めていただき、医療・介護現場におけるロボット技術の普及・発展に資する OT が増えることを期待したい。

（野上 雅子）

企画担当

野上 雅子（特別養護老人ホーム万寿の家、作業療法士）

山本 伸一（山梨リハビリテーション病院、作業療法士）

竹内 さをり（甲南女子大学、作業療法士）